

# じんけん ぶんか まちづくり

一般財団法人とよなか人権文化まちづくり協会

第44号 (2014年7月)



## ◇目次◇

■理事のページ「わ～さんのこと」	3
■理事のページ「私たちは真実を知ることが出来るのだろうか」	5
■評議員のページ「“セクハラヤジ”にみる差別の本質」	7
■楽遊ガイド「今日は何の日？考」	9
■「にくのひと」上映中止事件を考える	11
■2014 連続講座「部落差別、その根っこを考える」第1講	14
■豊中地域から「2014 年度ふれ愛ネットがスタートしました」	16
■蛍池地域から「子育て・ふれあいの会の取り組みから」	18
■新聞切り抜き帖「美味しんぼの『福島県に関する描写問題』」	19
■書評「ルポ京都朝鮮学校襲撃事件」	21
■あとがき	23

## 表紙の写真「文楽」

人形浄瑠璃文楽の太夫（浄瑠璃語り）の最高峰、人間国宝の七世・竹本住大夫（89）の引退公演が国立文楽劇場（日本橋）であると知り、これは聴いておかねばと出かけた。文楽をめぐるのは、橋下大阪市長による補助金カットにより、その運営が厳しい状況に追い込まれ、大きな社会的問題にもなった。そのときに、まずは観ることが「支援」だと思って行ったのが最初だったが、「ようわからなかった」というのが正直な感想だった。字幕スーパーで語りが出るわかりよさはあるが、語りと三味線と人形の操り手と人形を一体的に観ることが難しく、焦点が定まらなかった。

今回の演目は通し狂言「菅原伝授手習鑑（すがわらでんじゅてならいかがみ）」で、住大夫が出る午後の部を観た。途中休憩をはさむものの、午後4時から9時まで5時間という長丁場で、「きついなあ、最後まで持つだろうか？」と案じつつ、劇場に向

かった。「桜丸切腹の段」で住大夫が登場すると、満員の客席から拍手と、「待ってました！」の掛け声がかかる。情感あふれる語りには涙する人も…。

2回目の感想を一言でいえば、「なかなか、面白いものだ」ということになろうか。初見時の違和感はなく一体感が感じられ、人形が生きているように見え、我ながら驚きだった。歌舞伎には歌舞伎の、能には能の、落語には落語の伝統、美の様式があり、それぞれの世界で磨きあげられた魅力がある。ナレーターと役者の全部を一人でこなす大夫による義太夫節の熱唱・熱演、琵琶の音にも似た三味の音が深く響き渡り、絶妙のハーモニーとなる。3人の人形遣いに操られる人形は、操り手によって命が吹き込まれたかのごとく蘇る。かくして、三者の呼吸が重なり、異空間が出現する。これが文楽の醍醐味なのかもしれない。（佐佐木）

## 理事のページ

### わ~さんのこと

桑高 喜秋（理事）

「名は体を表す」と言うが、平尾 <sup>たいら</sup>和さんの名前を本名で呼んだことは一度もなかった。和と書いてどうして「たいら」と読むのか。大きな漢和辞典を引いてもそんな読み方は載っていない。「なごやか」「にこやか」というのが「和」の素直な読みであるし、この方が断然わ~さんらしいと思う。

3月の半ば、アポなしで豊中病院に見舞いに行った。7階のナースセンターで尋ねると、面会は可能だと言う。開け放たれた4人部屋を覗いてみる。手前の左側のむき出しになったベッドには、酸素マスクをした男の人が口を大きく開いて苦しげに喘いでいる。右のベッドは空っぽだ。奥のベッドは二つともカーテンで閉ざされている。左側のカーテンの隙間からベッドを覗くと、誰もいない。残るひとつがわ~さんのベッドに違いない。「わ~さん、来たで~!」とカーテンを開けて驚いた。全然知らない人が、向こうも驚いた顔で、「あゝ、お隣さんなら今検査に行ってますわ」と教えてくれた。

それじゃあ病室の外で待とうと思って、さっき素通りした患者さんのベッドを見ると、相変わらず苦し

そうだ。ベッドの棧に小さな名札がかかっている。その名札を覗き込んで、ぼくはすっかりうろたえてしまった。

そこには確かに「平尾和」と書いてある。「ウソや!・・・ほんまに?」あのがっしりした体つきがまるで別人のようにやせ細っている。「わ~さん・・・?」ぼくは細い声をあげた。必死になってわ~さんの面影を探す。痩せこけてはいるが頭はデカイ。(なんでこんな見分け方しかできないんだ、俺は!)などと、混乱した頭で考えてしまう。眉毛も太くて立派だ。(わ~さん、これほど立派な眉毛してたら、絶対に長生きするはずや、ゼツタイ!)と、またしても訳も分からぬ叫びが頭の中を駆け巡る。

その時、寝返りをしたわ~さんがうっすらと目を開けた。じ~っとこちらを見ている。ぼくは駆け寄って手を取った。点滴で傷だらけになった右手を両の掌に押し包んで「やっと来れたわ、わ~さん」と声をかけると、しばらく目の焦点を合わせていたらしいわ~さんが、「うん、うん、」とうなずいてくれた。会話こそなかったが、あのやわらかい眼差しはまさしくわ~さんのものだった。

わ～さんとの付き合いは長い。しかし役所では一度もいっしょに仕事をしたことがない。組合運動を通じての付き合いである。最初の出会いは市職の歌声サークルで、わ～さんはかなり厳しい指導者だった。バリトンのわ～さんのほかにテノールの松本城洲夫さんもいて、音楽のことはほとんどわからないぼくらをそっちのけにして、二人の間には曲想を巡る熱い議論があったようである。

熱い議論と言え、70年代から80年代半ばまでかけて、執行委員会は戦術を巡って激論に継ぐ激論であった。「口



平尾さんが手がけた豊中人権展ポスター（1985年）

角泡を飛ばす」と言えば聞こえがいいが、ほとんど喧嘩だった。その中であって、わ～さんは不思議な存在だった。それぞれの陣営は(ぼくも含めて)自分が属する組織にどっぷりと浸かりこんだ立場からものを言ったが、わ～さんにはそれがなかった。なんのこだわりもなく議論に入ってきた。喩えは悪いが、ヤクザの抗争で睨み合っている真っ只中へ素人が飛び込

んだようなものである。いま考えると、それがわ～さん流のやり方だったのかもしれない。(断っておくが、かつての喧嘩相手もいまではかけがえのない友である。)

平尾和の世界はいわば「無」である。「闇」である。武器もなく、鎧もなしに、素手のまま彼は「その場」に飛び込んでゆく。そして「その場に自分を置く」ことで自分の世界を築いてゆく。それが平尾流である。部落解放運動に対して優しくもあり厳しくもあつたわ～さんの関わり方の根源はそのあたりにあつたのではないかと思う。

わ～さんの描く「まんだら図」はすごい。緻密である。時空を取り込んで包括的である。ただ残念なことに、ぼくらの次元では到底理解できないのだ。あの「まんだら図」もまた、わ～さん独特のものごととの関わり方から生まれたものにちがいない。

役所をリタイヤしてからのわ～さんのことはあまり知らないが、そういうわ～さんの生き方が「きずな」にかかわって大きく花開いたとぼくは思う。「とにかく現場に飛び込んで、そこから考える」わ～さんだからこそ、人と人・組織と組織・流れと流れを結ぶことができたと思うのである。

名は体を表す。「和」はまた「足し合わせる」ことでもあつた。合掌。

## 理事のページ

### 私たちは真実を知ることが出来るのだろうか

八塚 勇一（理事）

パソコンでユーチューブを視聴したら、「徹底検証！テレビは原発事故をどう伝えたか」というのがありました。作成されたのは2年前、事故後1年での検証です。

検証は①緊急事態をどう伝えたか②避難指示をどう伝えたか③1号機爆発をどう伝えたか④被爆リスクをどう伝えたかの4点です。NHK、民放の当時の放送を見ながらの検証でしたのでわかりやすいものでした。

私の当時の印象は「大丈夫、安心、危険はありません」ばかりだった気がしていましたがやはりそうでした。ただ一人だけ11日に電源断で冷却水が送れていないとメルトダウンの危険があると指摘した人があるが、その後一切その人はテレビに登場していないそうです。テレビに出てくるのは原子カムの御用学者だけで「安心して下さい」と言うだけでした。

1号機の爆発を福島中央テレビは、4分後にその映像を流していますが、親局である日本テレビを含めて東京の放送局は、約1時間後に報道。そして異口同音に圧力を逃がすベントを意図的に爆破したんだろうと解説しています。

国民に本当の危機が来たときに、

報道も含めて私たちはその事実を知ることが出来るのだろうかという疑問を持ちました。自分で調べなくてはならないとは。ついでに原発関係のものを視るといろいろなものがありました。一度視てみてはどうでしょうか。

#### 「フクシマの真実と内部被曝」

小野俊一さんという熊本の内科医が全国各地での講演のビデオです。各地での講演の分があります。東大の工学部を出て、東京電力に就職。福島第2発電所に勤務後本社で原子力安全管理の部署に勤務。その後退職して熊本大学の医学部に入学して熊本で開業している人です。原発やメルトダウンの説明がとてもわかりやすかったです。3号機の爆発は、核爆発であったということも説明していました。被爆の被害についての説明がありました。私が視たのは、医者相手の講演でしたのでチェルノブイリの知見を参考に患者を診る必要を行っていました。

#### 「報道特別番組 作業員が語る福島第1原発」作成 MBS ラジオ

福島で働く原発作業員の肉声です。

ピンハネのことや安全管理の現状など様々なことが語られます。2012年に放送されたものと2013年に放送されたものの二つあります。

### 「メディアは何を伝えたか～検証原発事故報道」

毎日新聞労組などが主催。主に紙メディアの検証だと思えます。まだ全部を視ていません。

### 「フクシマのうそ」（吹き替え版）ドイツのZDF作成

視る価値があります。菅直人もインタビューを受けています。この中で語られている「東電原発トラブル隠し」については、岩波ブックレット「検証東電原発トラブル隠し」が2002年に出され、2011年に増刷されています。

物事を多角的に見ることはなかなか出来ません。歴史もそうです。NHKBSで放送されたオリバー・ストーン監督による「もう一つのアメリカ史」は全部を見られませんでした。おもしろかったです。私たちが教えられてきたアメリカを中心とした現代史に疑問を呈するものです。早川書房から3分冊で出版されています。そして、雑誌「世界」6月号にノーム・チェムスキー氏へのインタビューが掲載されていました。その中で、ロシアのクリミアへの介入は批判していますが、アメリカのイラク侵攻はずっとたちが悪かったけどそのこと



を指摘するメディアはいません。

「優れた教育」による「刷り込み」が高学歴の人たちの精神と思考がコントロールされていると述べていました。自分の頭で考えるということとはなかなか難しいです。しかし、いろいろな角度から書かれたものを読むことで少しは補完されるかもしれません。

ついでにもう一冊。ナオミ・クライン著「ショック・ドクトリン 惨事便乗型資本主義の正体を暴く」（岩波書店2分冊）ピースポートで40年ぶりに会った人から紹介された本です。経済学者ミルトン・フリードマンが提唱した自由放任資本主義がもたらすものについて書かれたものです。壊滅的な出来事が発生した直後、災害処理をまたとない市場チャンスと捉え、公共領域に一斉に群がるこのような襲撃的行為を著者は「惨事便乗型資本主義」と呼んでいます。

紹介だけですが、視たり、読めば少し視野が開けるかもしれません。

## 評議員のページ

# “セクハラヤジ” にみる 差別の本質

野坂 祐子（評議員）

東京都議会本会議での“セクハラヤジ”が起きてから約一週間を経た現在、ようやく名乗り出た発言者の一人が謝罪するに至った。マスメディアでの非難は、この議員が数日間、自らの発言を否認していたことに向けられ、「早く謝罪すればよかったのに」とのコメントが目立つ。都議会も自民党も、この問題を発言者個人の責任にすりかえ、事態の収束を図ろうとしているようにみえる。ネット上の匿名投稿では、他のヤジはそもそもなかった（ねつ造）とか、ヤジをとばされた女性議員の過去の言動をあげつらったの批判、女性はすぐにセクハラと騒ぐため“男性差別”であると揶揄するカキコミも少なくない。いずれも、“セクハラヤジ”の問題を矮小化するものだ。

「早く結婚したほうがいいんじゃないか」という発言そのものもさることながら、この発言をめぐるさまざまな余波のありように、セクハラという差別の特性がみてとれる。差別は、①その言動が許されるだろうというマジョリティ側の思い込み（権力をもつ立場の鈍感さ）があり、その背景には、②その言動を許容する

風潮や文化がある。そして、たとえ被差別側が異議申し立てをしても、③「そんなつもりはなかった」と発言の意図をずらすことで正当化が図られ、④問題は「些末なこと」と意味づけられる。それによって、⑤そんな「些末なこと」を騒ぎ立てるほうにこそ問題がある（差別されても当然だ、わがままに過ぎない）という“問題のすり替え”がなされる。これは性差別に限らず、さまざまな差別にあてはまるだろう。

一方的に向けられた差別発言に対し、言われた側は何らかの反応をとらざるを得ない。誹謗中傷の言葉を向けられたとき、言い返すにせよ、受け流すにせよ、言われた側は何らかの反応をとることを余儀なくされる。無反応すらも、意味を含んだ反応になってしまう。無反応でいれば、発言者に対して「相手は気にしていない（だから誹謗中傷ではない）」という言い訳を与えることになり、意図せずとも差別の温存に加担してしまうことになるからだ。

つまり、差別発言が生じた時点で、言われた側は圧倒的に不利な立場に

たたされる。実際に、今回の“セクハラヤジ”においても、ヤジに対して苦笑しながら質問を続けた女性議員の態度について、「その場で反論すべきだった」という批判も向けられている。会議中の様子を見て、「本人も笑って同調していた」と捉えた議員もいたかもしれない。しかし、会議中のヤジに対して、「どういう意味ですか」と真っ向から反論すれば、「たかがヤジにムキになるとはおとなげない（女はすぐに感情的になる）」「大事な質問の時間を無駄にした（議員として未熟だ）」と言われる可能性がある。たとえどんな反応を示したとしても、結局は言われた側の行動が問題にされてしまうのだ。

このような事態に一方的に巻き込まれる構造こそが、ハラスメントや

差別の特徴である。両者の関係は対等ではない。これはヤジではなく、誹謗中傷というぶしつけな暴力である。しかし、一方にとっては、“たかだかヤジ”にすぎない。だから、異議申し立てに対して、「(もう謝罪したのに) いつまでも気にするほうが問題」「難癖をつけられて、こちらのほうが被害者だ」と思い、両者の溝は深まっていく。暴力をめぐる当事者間のズレは、現在のアジア諸国との歴史認識の違いとも共通する。

差別は、ある個人の偏狭な考えだけでは生じない。それを許し、認め、支える社会の価値観があってこそ成り立つ。だから、差別は社会の問題である。都議会という場で、誹謗中傷に追従し、扇動した複数の嘲笑こそが、今回の問題の根幹にある。それは発言者の所属する党に限った問題ではない。

そもそも、発言した議員による謝罪の言葉も、まったくトンチンカンなものである。「様々な理由で結婚できない方々への配慮が欠けていた」と言うが、その前提には「結婚するのが当然」「結婚“できない”人たちは、配慮を要する方々である」という考えがある。その発想自体が、さまざまな生き方を抑圧するハラスメントであることに気づいていない。なぜ、個人の評価に（ましてや仕事上の関係や公的な場面において）“結婚”云々



6月24日毎日新聞

を取り沙汰することが不適切なのか、その根本的な問題を理解することなく今回の件を“セクハラ”と称するなら、謝罪は単なる失言への反省に

すぎない。“言葉狩り”をおそれた再発防止は、差別への取り組みを形骸化させ、深刻化させるだけである。

## 楽遊ガイド

## 「今日は何の日？」考

～365日、空白はありません～

石原 敏（評議員）

6月15日は、父の日、さくらんぼの日、そして樺美智子さんの日ですが…

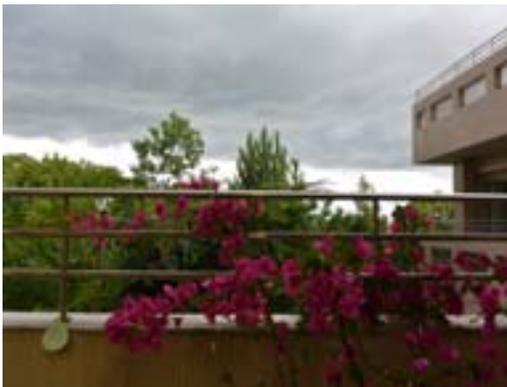
8月11日の祝日論議で「〇〇の日」が気になったのが、きっかけでした。この日は「山の日」ということで、2年後？祝日になるらしいですが、私にとっては「答申」の日なのです。1965年のこの日、「内閣同和対策審議会答申」がでて、部落差別問題の解決が「国の責務であり、国民的課題」となりました。「解放令」から94年、水平社創立から43年かかりました。「毒まんじゅう」論争があり、運動の分岐にもなりましたが、扇町公園にあった、大阪プールでの集会で、

通路からスタンドに出た時の熱気が忘れられません。運動に首を突っ込んだ時でもあり、クソ暑さが重なっていたことでもあります。ゾクゾクと鳥肌が立った集会のひとつです。

それで、8月11日は何の日？とガラケーのカレンダーをめくってみました。「ガンバレの日」でした。夏山に「ガンバレ」はつきものでしょうが、「前畑ガンバレ」（1936年のベルリンオリンピックで実況中継アナウンサーの連呼36回）が由来でした。

例えば6月ですが、

- 1日ーチューインガムの日、麦茶の日、写真の日
- 2日ー横浜開港記念日
- 3日ープロポーズの日、ベビーデー、測量の日
- 4日ー虫歯予防デー、ローメン記念日
- 5日ー世界環境デー
- 6日ーおけいこの日、かえるの日、ほんわかの日
- 7日ー母親大会記念日
- 8日ー成層圏発見の日
- 9日ーロックの日、ロックウールの日



10日ー時の記念日、ミルクキャラメルの日  
 11日ー雨漏り点検の日、傘の日  
 12日ー恋人の日、バザー記念日  
 13日ー小さな親切の日、鉄人の日  
 14日ーフラッグの日、日記の日  
 15日ー父の日、さくらんぼの日、千葉県民の日、栃木県民の日  
 16日ー和菓子の日、ケーブルテレビの日  
 17日ーおまわりさんの日  
 18日ー海外移住の日  
 19日ーベースボール記念日、京都府開庁記念日  
 20日ーペパーミントデー  
 21日ースナックの日  
 22日ーボウリングの日、かにの日  
 23日ー沖縄慰霊の日、オリンピックデー  
 24日ーUF0の日  
 25日ー住宅デー  
 26日ー露天風呂の日  
 27日ー奇跡の人の日、日照権の日  
 28日ー貿易記念日  
 29日ービートルズ記念日、佃煮の日  
 30日ーハーフタイムデー、アインシュタイン記念日などなどです。

「言ったもの勝ち」？感ですが、こんな調子で1月から12月まで埋まっています。「なにこれ？」って、笑ってしまうもの、首をかしげるもの…多様です。うるう年の2月29日は「跳躍の日」となっています。

祝祭日、歳時、季節、出来事、人物、語呂合わせなどによっているようですが、公的なもの以外は、日本記念日協会、日本記念日評議会、日本記念日学会などがあり、登録制度に拠っているようです。情報過多、自己膨張症の感ありで、SNSリテラシーが必須ですが、ウィキペディアなどが、由来など、いろいろ教えてくれ、楽しめませう。

さて、あなたにとって、今日は何の日でしょうか。

「全国水平社創立宣言と関係資料」が、2015年のユネスコの「世界記憶遺産」登録の国内選考からもれましたが、1922年3月3日は永遠です。因みにこの日は、ひな祭り、桃の日、結納の日、耳の日、三の日とにぎやかです。

人権文化のまちづくり講座

「映画・西部戦線異状なし」

とき：8月27日（水）午後6時30分～8時30分

会場：豊中人権まちづくりセンター

ドイツのエリッヒ・マリア・レマルクが書いた世界的大ベストセラー「西部戦線異状なし」の映画化。

入場無料

問合せ：豊中人権まちづくりセンター 電話：06-6841-5300

# 「にくのひと」 上映中止事件を考える

佐佐木 寛治（事務局長）

大阪芸術大学の学生（当時）の満若勇咲さんが制作した「にくのひと」の上映会を豊中で行ったのは、2009年3月19日で、上映後、満若さん本人の話と参加者の意見交換もしたが、そのときのレポートで次のように書いた。

「人はそれぞれの立場や視点で観るわけだが、おうおうにして自分の印象や感じ方を作品に投影して、『こうあったほうがいい』とか『こうあるべきだ』などと、お仕着せをしてしまいがちにもなる。満若さんの動機

や手法、目的、部落問題への向き合い方などが、自分とちがっているのは当たり前なのだが、そこを無理に埋めようとする、作品は死んでしまいかねない。」

「また、フィルムが作品として世にでたことによって、作品は彼の思惑や予想を越えて、作品として一人歩きをする。だから、『啓発映画にはしたくなかった』という彼の思いも越えて、啓発映画としての役割も持たされることにもなることも避けられない。作品が含んでいる問題は多様

「にくのひと」監督の満若勇咲さん。完成した映画は部落問題にたずさわる多くの読者にも高く評価されたが、公開直前に運動団体の抗議によってお蔵入りとなった。若い映画監督の視点を通るものは何なのか。ノンフィクションライターの角園伸彦氏がその背景に迫った。

## 映画「にくのひと」は、なぜ上映されなかったのか

部落問題をタブーにしているのは誰なのか

7年前、一人の大学生が落着き労働現場の撮影に奮闘した。完成した映画は部落問題にたずさわる多くの読者にも高く評価されたが、公開直前に運動団体の抗議によってお蔵入りとなった。若い映画監督の視点を通るものは何なのか。ノンフィクションライターの角園伸彦氏がその背景に迫った。

角園 伸彦

で、いろんな切り口からの議論を呼ぶことも必然だ。逆に言えばそれだけいい作品だということだと思う。」

ところが、「週刊金曜日」990号（5月9日）を見て驚いた。ノンフィクションライターの角岡伸彦さんの「にくのひと」の公開中止をめぐるレポート（全6ページ）があったからだ。（以下、「」内は同記事からの引用）

それによると、2011年春の一般公開に向けた準備のさなかの2010年10月中旬に、「地元の部落解放同盟S支部が『内容に問題がある』として『待った』をかけた」と言う。満若さんは、「部落解放同盟兵庫県連合会幹部の立会いのもと、食肉センターがあるS支部の支部長、書記長らに会った。支部長の指摘・要求は、大きく分けると二つあった。一つは、若者が部落差別を笑いのネタにするシーンの削除。もう一つは、インタビューで出演者たちが語る地名や『エタ』などの賤称語、食肉センターの住所を表記したシーンのカットである」

そして、「支部長と会った翌日、満若氏は中尾氏（撮影を快諾し、協力してくれた加古川食肉産業協同組合理事長）に会い、支部長の要求・言い分を伝えた。中尾氏は、S支部が要求する、食肉センターの住所表記や出演者が発言した地名の削除について『その必要はない。新聞でセンターが取り上げられたときは住所が明

記されている。地名を出したらあかんというのは“寝た子を起こすな”という考え方と一緒に。解放同盟は、そういうのと闘わなあかんのと違うのか。こうやって隠してばっかりいても差別はなくならん』と言った」

しかし、事態はさらに動く。

「映像で中心的に登場する24歳の屠場労働者が、公開されることで自分や家族にも危害が及ぶことを危惧し、上映の中止を満若氏に求めた。支部長やその家族はこの若者に公開後、賤称語の使用に怒った者が襲撃するかもしれない、と伝えていた。最初は撮影も上映も快諾していた別の屠場労働者も、騒ぎが大きくなるにつれ『子供に仕事を見せたくない』という理由で公開を渋り始めた」

かくして、「年が明けた11年1月、満若氏は一般公開を断念する」

レポートは、「差別を笑い飛ばす」こと、「地名や住所の明示」について、映像を検証しながら論点を炙り出していくが、そこには部落解放運動が内包してきた宿痾しゆくあとも言うべき問題が潜んでいることを突きつけられ、言葉を失う。

レポートは、次のように締めくくられている。

「映画が公開されないことによって、当然のことではあるが、何の波風も立たなかった。私たちが失ったものは何もない。しかし

同時に、得られたものも何もない。確実に言えるのは、部落差別の多様ななくし方を認めず、『だれ』『どこ』を曖昧にする限り、屠場やそこで働く人びとの撮影は、ますます難しくなる、ということである。そのことと、部落差別の解決が別問題であることは言うまでもない」

全く同感だ。豊中での上映会后、問い合わせが続いたので、3度のアンコール上映をし、小学生から高齢の方まで70人余りが訪れた。そのときのアンケートから拾ってみる。

- 決して押しつけがましくない、良い作品だ。
- 食肉センターで働く人たちの表情が実に良い。
- 色々なことを考えながら、一つも見逃さず見ました。
- と場はこわいイメージがありましたが、この映画を見て、いい印象を持ちました。
- 私自身の差別意識にももっと向き合わなければならないという課題を与えられました。

60分足らずの作品だが、詰め込まれているものはその幾倍もあり、それが見る人のいろんな関心や興味と響きあっていることがわかる。だから、反響には終わりはないような気がする。評判は巷をめぐり、また新しい出会いの場に繋がる。静かにじわりと広がっていく・・・と思って

いた。作品が含んでいる問題は多様で、いろんな切り口からの議論を呼ぶことも必然だとも書いたが、まさかこんな事態になっていたとは???

何よりも多くの方が評価をした作品が、一部の人の異議によって「お蔵入り」になること自体が問題ではなかろうか？少なくとも、その異議を含め、開かれた場で議論があってしかるべきだ。水面下でのやりとりで密かに「始末」されていくことの害毒は計り知れないものがある。本当に残念至極、痛憤の思いを禁じ得ない。

角岡さんのレポートは、部落問題解決および部落解放運動にとって、重大な問題を投げかけている。一連の事態について、誰が把握し、どのような対応をしたのか？あるいは、地元しか知らなかったのか？関係者は明らかにしてほしいものだ。とは言ってもそんなことは望み薄いことは言うまでもない。だが、あの橋下問題で動いた事を思えば、この問題で沈黙するのはどうかと思う。この問題は部落解放同盟だけでなく、部落問題に向き合い、それを自分事としている、しようとしている人たちすべての問題であることは言うまでもない。しかし、誰も声を上げないようだ。ここにも違った意味で、深刻な問題が潜んでいると思う。

## 2014 連続講座 「部落差別、その根っこを考える」

### 第1 講歴史編 「部落史再考」 お話：寺木伸明さん（桃山学院大学）

2014連続講座がスタートしました。予想を上回る参加者の数に、なぜ部落差別が残っているのかに対しての関心が多いことに驚きました。6月4日の第1講には桃山学院大学の寺木伸明さんにお越しいただきました。

寺木さんは大学院の修士論文を、昔、岡町近くの旧桜塚村庄屋宅の古文書を見せていただいて書きましたが、当時は部落史の視点がなく、農民の状況を分析するだけで終わってしまい、その後、博士課程に入ってから部落問題に出会い、それから江戸時代の被差別部落について勉強されたそうです。講演後は質疑応答の時間も足りないくらいの質問が出て、昨年に引き続き、連続講座でたくさんのお話を学ばさせていただきました。文責：福島智子（事務局）

#### 部落差別の定義と身分の形成

部落差別とはいろんなとらえ方があるのですが、特に部落解放同盟が綱領・方針などでまとめているところを踏まえていうと、歴史的・社会的に形成された被差別部落に居住しているか、かつて居住していたという事情等によって受ける差別をいいます。

なお、被差別部落は、原則として身分・職業・居住が固定された、前近代における被差別身分の人々の居住地と関連を有し、現在の部落差別は、身分差別の1つの形態が部落解放運動などの力によって徐々に崩れ、現在に至っているということで、身分差別の歴史の部分からお話します。

部落差別に直接関係はありませんが、今から2000年ぐらい前や紀元後



3世紀ごろの社会には、3階層から4階層の人々がいて、上層の国王や女王は最下層の人々をお土産にしたり、古墳などに埋葬する時に、生きてまま下層の人々を亡くなった女王と一緒に埋葬するなど、ひどい扱いを受けた奴隷的階層の人々が形成されていきました。

#### 大乘仏教などにみられるケガレ観

古代の身分制度は中国から入ってきていますが、中国にもなかったケ

ガレ観念は日本固有の観念です。

部落差別に結びつく差別の始まりは3つあります。

1つは「大乘仏教」の中で屠畜業者や皮革業者がケガレ観念により排除されていきました。

2つは、平安時代の「延喜式」などと呼ばれる当時の法律によって屠畜業者や皮革業者がケガレ観念によって不浄視されていきました。

3つは、神社における、ケガレを避けようとする物忌みの規定の影響がありました。

釈迦の教えを比較的良く伝えているのは原始仏教で、平等志向が強く、原始仏教の仏典にはほとんど差別的記述はないと言われています。ところが、釈迦が死んで数百年後に成立した大乘仏教經典にはほとんどもない差別的内容が含まれています。釈迦の死後、仏教を盛り返す為に当時の僧侶たちが、現在でいうヒンドゥー教の教えのなかの、最も悪い部分を取り込んだと思われ、このヒンドゥー教の中のケガレ観念が大乘仏教に入ってしまった。

奈良時代には、『陀羅尼集経』という密教系經典が受容されていましたが、その中で人や獣の死や血に関わることがケガレとされ、後にこれが法律の規定につながっていったと考えられます。

平安時代の「延喜式」などの法律によってケガレの規定がなされるようになり、人の死や家畜の死に触れ

ると穢れるとか、血に関わって、女性は出産や生理などで穢れるなどと定められ、このことが葬送業者・屠畜業者・皮革業者に対する差別や女人禁制につながり、そのことで神社からも排除されていきました。

こういう考えや風習が、上層身分から下層身分へと降りてきて、また、京都から地方へと広がっていき、これまで差別をしていなかった人々も、次第に屠畜業者や皮革業者を差別し排除していくようになりました。

### 被差別部落の成立と江戸時代の生活実態

学説的に被差別部落はいつごろ形成されたかについては、「中世政治起源説」や「中世社会起源説」、その他「近世政治起源説」などが論じられています。私は、中世被差別民が職業差別を受けたり共同体から排除されたりしていましたが、そのことを前提として最終的に幕藩権力が皮多（主として西日本の呼称）・長吏（主として関東地域などの呼称）として被差



別身分化したのが被差別部落の起こり（部落差別の始まり）であると考えています。

豊臣秀吉が天下を統一する時、「検地帳」を作りました。「検地帳」とは、1人1人どこに田畑を持っていて、どれだけの収穫が見込めるのかが記載されていますが、その一部に「かわた」と肩書きされた人々が出てきます。この「かわた」が「穢多」に変わっていった、部落を示す肩書きになりました。

中国で紀元前から使われていた「士農工商」という用語は、身分の別ではなく職業の別を示す言葉でしたが、江戸時代、無理矢理身分の区別に変えて説明されるようになりました。

江戸時代の部落の人々の実態はというと、キヨメの社会的機能を持っ

ていたので、死牛馬（穢れとみられていた）の無償取得が保証されていて、皮革業およびその関連の仕事（たとえば雪駄作りや太鼓作りなど）が独占的にできることになっていました。その他、多くの部落でかなりの耕地を所持し、農業経営に携わったり、医薬業に従事したり、実に多彩な経済活動を行っていました。

ところで、三味線の胴に張る猫皮を扱っていた部落の人々は、かつて近隣の住民から、夜な夜な飼猫を取りあさっているかのように誤解されていましたが、実際には別の業者が猫の生皮を売りに来ていて、それを立派な革に鞣していたのでした。作る者が差別され、使う者が尊敬される。このように差別はすべて不合理なものであります。

## 豊中地域

### 2014年度ふれ愛ネットがスタートしました

酒井 留美（事務局）

6月19日（木）ふれ愛ネット（五中校区地域教育協議会）全体会が開催され、2014年度の活動案をみんなで確認し合いスタートしました。

地域における「であい・ふれあい・つながり」を大切にしてきた「ふれ愛ネット」の活動をつくっていく一人ひとりが元気をもてるような協議会にしたいと、事務局次長（第五中

学校）があつく語られました。

「私は今から4年前に第五中学校に初任者として赴任しました。最初は無我夢中で周りの事が何も見えていなかったのですが、少し見えるようになってきたときに、この『ふれ愛ネット』について知りました。私自身は、『地域連携』という言葉は、学



生時代からもよく聞く言葉ではあったのですが、それが何を意味するのか、いまいちわかりかねていました。しかしこのふれ愛ネットの存在を知ること、その意味が少しわかってきたような気がしました。そのとき率直に思ったことは、教育についてこれだけ多くの地域の人たちが真剣に考えているのか・・・。

小学校、中学校だけじゃなく、人権まちづくりセンターのみなさん、PTA、地域住民のみなさん、幼稚園・保育所のみなさん、これだけの人たちの思いがあって、地域や教育がつくられていくのだということです。それから今日まで、ふれ愛ネット主催の取り組みに参加し、運営に関わるようになってから、より一層「地域でのつながり」「子どもどうしのつながり」「おとなと子どものつながり」「おとなどうしのつながり」ということを意識するようになり、それは自分自身の教育活動をも振り返る大切な糧となっています。そのような「ふれ愛ネット」だからこそ、今年度、本協議会がどのようにして活動して

いけるのか私は大きな期待とともに、大きな緊張感を抱いております。これまでの大変分厚い取り組みの歴史を抱えていながら、ともすればそれが形だけになってしまう危険性もあります。なおかつ人の入れ替わりも重なり「ふれ愛ネットが何を大切にしてきたのか」「なぜ、この取り組みをしているのか」「ふれあいネットを通して、どういうまちをつくっていきたいのか」という思いが本当に引き継がれているのか不安が残ります。今の状況をしっかり振り返り、今年度のふれ愛ネットをどうしていくのかを真剣に考えていくことが急務となっていると考えます。今年度スタートさせるにあたり、そのあたりの認識を決して忘れてはなりません」

今、ふれ愛ネットに関わる人に求められているのは、ふれ愛ネットの原点でもある「人権・子育て・共生」とはどういうことか、それぞれの取り組みの意義は何なのかなどを考えること、昨年もやっていたから、今年もそのまま取り組みをするのではなく、今の子ども、おとな、地域にとってどうなのかを検証すること、そしてそれを通じてふれ愛ネットに関わる一人ひとりが主体者なのだという自覚をもって取り組みができればと思います。

## 蛭池地域

### 「子育て・ふれあいの会」を中心に、人権を大切にした取り組みと地域連携を・・・

福島 智子（事務局）

蛭池地域では、地域教育協議会「子育て・ふれあいの会」を中心とした取り組みが進められています。

そのスタートとして取り組まれている「人権から地域を考える集い」が、6月5日に蛭池人権まちづくりセンターのホールで開催されました。昨年度まで蛭池保育所に勤務されていた西原美保子さんに「出会いの中で変わった自分！～子ども・保護者・地域との出会いの中で～」と題して、お話ししていただきました。

具体的な子どもたちの関係や姿に向き合ってこられたこと、保護者との出会いの中で、自分が問われたことなどを通して自分が変わってきたお話などを、時に笑いを入れながらお話ししていただきました。

保育所・小学校・中学校で勤務されている先生方や、これまで西原さ

んと出会ってきた保護者など、たくさんの参加があり、温かい雰囲気のお会場となりました。

その後、6月15日には、「ふれあい教育研究集会」が、蛭池小学校と第十八中学校を会場とし、学校・家庭・地域が連携して取り組む「協働授業」が行われました。小学校1年生から中学校3年まで、各学年やクラスの子どもの課題解決に向けて、保護者の方々にも協力してもらい、一緒に授業を作り上げていく取り組みです。今年で17回目になりましたが、たくさんの保護者の方々も参加していただき、今後の学校の取り組みに繋がっていくと実感しました。

7月26日には「蛭池納涼祭」、8月以降も、人権講演会など取り組みが予定されています。

2014年度「平和と人権週間」講演会

### 「ある精肉店のはなし」

講師：北出 昭さん（貝塚市人権協会会長）

とき：8月5日（火） 午後6時30分～8時30分

会場：蛭池人権まちづくりセンター2階ホール 保育有（要申込 有料）

問合せ：蛭池人権まちづくりセンター

電話：06-6841-5326

※映画の上映はありません

## 新聞切り抜き帖

# 美味しんぼの「福島県に関する描写問題」をとおして思ったこと

重本 洋輔（事務局）

漫画「美味しんぼ（原作：雁屋哲、作画：花咲アキラ）」の福島県に関する表現が様々な波紋を呼び、大きな議論が起こったことはニュースや新聞にも取り上げられたのでご存じの方も多いのではないだろうか。

「美味しんぼ」とは、小学館のビッグコミックスピリッツにて連載されている主人公「山岡士郎」を中心に食や料理をテーマにした様々なストーリーが展開され、現在は不定期ながら30年以上も連載が続いている人気漫画である。一見、グルメ漫画というイメージが強いかもしれないが、食をとおして様々な文化や歴史について紹介したり、戦争や環境、その時々々の社会問題が取り上げられるなど、扱う内容の幅も広い上、奥の深い社会派漫画である。僕自身も以前はコミックスを愛読しており、この漫画をとおして得た知識や受けた影響も多い。

今回、問題となったのは、「福島県の真実」で、山岡士郎が福島県の取材（福島第一原発等）に行った後、

鼻血を出すといった描写があり、また、前双葉町町長の井戸川克隆氏（実名で登場）が「私も鼻血が出ます。福島県では同じ症状の人が大勢いますが言わないだけです」などと発言するシーンである。この話は原作者である雁屋氏が福島県を2年間かけて取材した上で書かれたもので、鼻血の表現についても雁屋氏の実体験であるようだが、これに対して読者



5月20日毎日新聞

等から「誤解を生む」、「差別や風評被害につながるのではないか？」などといった批判や問い合わせが殺到したのだ。また、その後も「今のところ放射能汚染と鼻血を関連づける医学的知見はない」としながらも、井戸川氏が鼻血は被曝が原因であると説明する場面の他、福島大学准教授の荒木田岳氏（こちら実名で登場）が「福島を除染して人が住めるようにすることはできないと思います」と述べる場面や被災地のガレキの処理をおこなっていた大阪市でも、焼却場近辺で約8割の人間が健康不安を訴えていると説明する場面が描かれたことで、福島県だけでなく岩手県や大阪府も抗議するなど、大きな問題に発展した。

報道や執筆物をとおして誤解や不安を与えるようなことがおこなわれたり、差別や風評被害につながるようなことはあってはならないと思っている。しかし、同時に真実は真実として隠すことなく正確に伝えることも必要だ。今回の件がきっかけで、過剰反応が起こり、放射線被害の真

実や原発問題そのものに対して自由に意見や考えを出したり、真実を伝えることができない雰囲気がつくられてしまい、その結果、原発や放射能問題を風化させてしまうことは絶対にあってはならない。

今回の「美味しんぼ」の表現に対しては、「医学的根拠はない」、「作者を始め、鼻血や体調不良が極一部の事例であるにも関わらず、さもこれらが福島の現状のように描かれている」などと批判されている一方で、逆に「医学的根拠はある」、「実際に鼻血を出す子どもがいる」、「よく真実を伝えてくれた」などといった意見もある。個人的には、これまでの政府の発表やマスコミ報道と当事者や専門家の意見が食い違っていること（原発や放射能の問題だけに限らず）と同様に果たしてどちらが正しいのか、まだ分からないというのが正直なところであるが、実際、福島県で様々な健康被害を訴える人がいることは事実であり、原発事故による放射能汚染の問題も福島県の復興の問題も何ら解決していないということを決して忘れてはならない。

### 人権パネル展「在日外国人と人権」

就労、教育、ヘイトスピーチなど、在日外国人を取り巻くさまざまな問題や課題についてのパネルを展示します。

とき：**7月7日（月）～16日（水）**

会場：豊中人権まちづくりセンター

## 書評

## 「ルポ京都朝鮮学校襲撃事件〈ヘイトクライム〉に抗して」

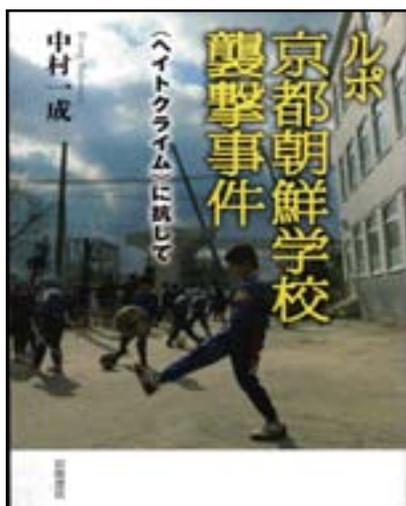
著：中村一成 いるそん 岩波書店

森山 輝子（事務局）

とにかく時間がかかった。1行読んで本を閉じ、1ページ読んで本を閉じ。なかなか前に読み進めることができない本だった。決して読みにくい文章ではないし、難しくもない。ただ、あまりにもリアルすぎて目をつむってしまいたくなった。

師岡康子さんの講演会と辛淑玉さんの講演会でヘイトデモの映像を見た。（昨年、人権文化のまちづくり講座でお話いただいた金尚均さんの講演は残念ながらお聞きすることができなかった）

耳を疑いたくなるような罵詈雑言やヘイトスピーチに反論した年配の男性への暴力行為。女子中学生が叫んだ「鶴橋大虐殺を実行しますよ！」というセリフには言葉を失った。しかし、なぜか映像を見ている自分は客観的でそれなりに冷静に見ることができた。が、この本は無理だった。当事者である自分がその場面にいることを想像してしまい、読むたびに頭がクラクラして、涙が出そうになる。もし私が通っていた神戸朝高に在特会が来ていたら。京都ではなく甥っ子たちがいま通っている伊丹朝鮮初級学校が襲撃されていたら。そして何もできない自分の無力感に苛



まれていた。そんなことを考えると本当に息苦しくて何度も何度も途中で本を閉じた。

22ページしかない第1章「当日」を読み終えるのに一体何日かかったんだろうか。それも友人の「最初のほうはツライけど最後のほうは勇気もらえるよ」の一言がなければ最後まで読み切ることができなかったと思う。

本書は事件当日の具体的な流れからはじまり、朝鮮学校の歴史、襲撃事件に対する法的措置についてなどが書かれている。特に戦後の混乱期に朝鮮学校ができた歴史的な経緯や京都朝鮮第一初級学校が公園を運動場として使用している理由が具体的

に書かれているのは興味深かった。

開校から半世紀、学校周辺には新しい大型マンションが建設され、事情を知らない新住民たちはなぜ公園にサッカーゴールがあるのかわからず、京都市に苦情を入れたりした。そして在特会に朝鮮学校への「抗議活動」を依頼したのもそのマンションの住民だったという。電車のなかで読んでいたが思わず「え？」と声を出してしまった。この住民は一体どんな思いであの罵詈雑言を聞いていたのだろうか。それとも一緒にヘイトデモに参加していたのだろうか。

そんな歴史的な事情をきちんと説明しない京都市の対応やデモに対する警察のふざけているとしか思えない行動。ヘイトデモに限らず、北朝鮮の報道がされるたびに朝鮮学校への抗議電話や学生たちへの嫌がらせは度々起きていた。この襲撃事件は、結局私たちを守ってくれる人はいないんだという保護者や関係者の無力感、喪失感を痛いほど感じてしまう出来事だった。それでも自分たちを奮い立たせて刑事告訴に踏み切った関係者たちの心労は想像を絶する。在特会のヘイトデモは朝鮮学校だけ

に限らず、京都弁護士会やメディアまで攻撃している。しかし、在特会に賛同するネット上のフォロワーやデモ参加者は回を増すごとに増えている。

在日外国人や障害者、性的マイノリティ、部落民。自分と違う。そんなモノはいらない、排除すべきと思っている人たちにとっては在特会の行動は共感できるものだと感じた。こんなことは表現の自由として許されるべきではないはずだ。メディアで報道されることがなかった襲撃後の子どもたちの様子や走り回る保護者の様子も丁寧に書かれている。腹を立てたり驚いたり泣いたりしながらもなんとか読み終わることができた。色んな思いが錯綜してなかなか文章がまとまらず締切にかなり遅れてしまった（ただの言い訳だが）。是非とも読んでいただきたい。ヘイトスピーチがあかんとかダメとかそういうレベルではない。人としてどう生きるべきか。その真意を問われている気がした一冊だった。

そして9月25日、著者の中村一成さんに「人権文化のまちづくり講座」へお越しいただくことが決まった。

人権文化のまちづくり講座

「京都朝鮮学校襲撃事件を考える」(仮)

とき：**9月25日(木)** 午後6時30分～8時30分

会場：豊中人権まちづくりセンター

講師：中村 いるそん 一成さん(フリーライター)

入場  
無料

**あとがき**

◆平尾さんの写真を探していたら、平尾さんが編集を担当していた「解放会館だより」が出てきました。今でいう豊中人権まちづくりセンターの情報紙です。1985年に発行された「会館だより」は当たり前ですが、全て手書きです。当時は手で書く以外の方法はありません。ですが、そのクオリティは素晴らしく、内容も今以上に濃いもので思わず読みふけってしまうほどでした。写真は見つかりませんでした。◆平尾さんの繊細な性格を知ることができました。◆すてっぷ主催、協会協賛事業で開催された3回講座「メディアでおしゃべり」はとても好評で毎回あつという間の時間でした。メディアはカギカッコ付きの現実を構成していることを改めて認識しました。原発報道も然りではないでしょうか。◆急な執筆依頼にも関わらずタイムリーな問題を的確かつ丁寧に書いてくださり脱帽です。あのヤジに対して笑いが起きたことにも呆れましたが、謝罪の内容にはもっと呆れました。質問者が女性議員ではなく男性議員でも同じヤジは飛んでいたのでしょうか。結婚・妊娠・出産を「当たり前」という感覚に「寝言は寝て言え」とヤジを飛ばしたい気分です。原稿の「セクハラヤジ」を「セクハラオヤジ」と読んでしまっていました。間違いではありませんね◆我が家のカーナ

ビもエンジンをかけると「今日は7月1日。〇〇の日です」と教えてくれます。ほとんどが「何じゃ、そりゃ」と思うようなものばかりで、車を降りるときには何の日だったか忘れていた毎日です。世界記憶遺産は1つの国からは2件しか申請ができません。カーナビから「今日は3月3日。水平社宣言の日です」と教えてくれる日が来ることを願わんばかりです。◆豊中での「にくのひと」の上映会は大盛況でした。満若氏本人も「豊中の上映会後にたいろんな意見が一番ためになった」と言ってくれました。当時の若い彼の素直さや感性だからこそ描けた作品だったのに一体、誰のための何のための解放運動なんのでしょうか。私が彼の立場なら、もう部落問題とは関わりたくないと思うはずです。◆シネヌーヴォのチケットを頂きましたが、西九条まで行くのが難しかったので宝塚のシネピピアで「それでも夜は明ける」を観ました。良いとか面白いとかそんな単純な言葉で言い表せられる映画ではありませんでした。泣くだろうと思ってタオルを手にしていましたが、衝撃的すぎて泣く暇もありませんでした。「アミスタッド」（97年・スピルバーグ）以来の黒人奴隷の映画でしたが、鑑賞後の何日かは鞭打たれるシーンが夢に出てきて眠れません。◆機関誌へのご意見ご感想お待ちしております（森山）

## 人権相談をご利用ください

### 1. 人権ケースワーク事業（豊中市からの受託事業）

#### ●定例相談

とき：月曜・水曜・金曜日の9時～17時

ところ：蛭池事務所（蛭池人権まちづくりセンター内）

電話：06-6841-2315

ひとりで悩まないで

#### ●出張相談

とき：毎月第2・第4木曜日の13時～15時

ところ：豊中市役所第2庁舎1階市民相談課

### 2. 人権相談（自主事業）

とき：月曜日～土曜日、事務所開設時（9時～17時）に随時受付

ところ：豊中事務所（豊中人権まちづくりセンター内）

電話：06-6841-5300

mail：jinken@tcct.zaq.ne.jp

## じんまち☆シネマ「眼の壁」

原作：松本清張 監督：大庭秀雄 主演：佐田啓二（95分）

7月25日（金）午後1時30分～ 26日（土）午前10時～

会場：豊中人権まちづくりセンター2階

#### ●編集：発行

一般財団法人

とよなか人権文化まちづくり協会

豊中市岡町北3-13-7 豊中人権まちづくりセンター内

TEL：06(6841)5300 FAX：06(6841)6655

E MAIL：jinken@tcct.zaq.ne.jp 郵便振替：00960-8-153806